

小鍛冶

(曲柄:切能 季節:不定 所:京都三條粟田口小鍛冶宗近宅)

ワキツレ	(勅使)	中山和也	笛	中山金重	地謡	中山晴剛
後ワキ	(三條宗近)	中山平二	小鼓	中山吉典	中山順一	
後シテ	(稻荷明神)	中山忠彦	大鼓	中山和衛	大滝正貴	
後見		太鼓	中山国雄	中山穂積		
加藤隆		後見	渡辺昌			

「構想」不思議な御夢想を受けさせられた一條院は、極道成を勅使として三條の小鍛冶宗近に御剣を打つべしと命ぜられた。宗近は御剣を打ち奉る為には自分に劣らぬ程の者が相鎚に必要であると思つたが、適当な者が居ないので、この上は奇特を頼むより外はないと思ひ、氏の神である稻荷明神に祈願のため参詣すると、一人の童子が現れて、君の御恵みによって御剣は必ず成就するであろうと安心させ、更に和漢に於ける剣の威徳を語つた後、通力の身を変じて力を添えようと言つて稻荷山の方へと消失させた。

中入一そこで、宗近は帰宅して壇に上り、壇の四方に祀つた本尊に祝詞を捧げると、稻荷明神が出現して相鎚を打たれ、打ち上げた剣を小狐丸と名づけて勅使に捧げ、再び稻荷山に帰られるのである。刀鍛冶の苦心を取扱つて、それに名剣の奇瑞を結びつけたものである。稻荷明神のことは、伝説や小狐丸からの箚想であろう。前段では剣の威徳を語るところに、後段では剣を打つ場面にそれぞれの中心を置いている。

大須戸能の由来

嘉永五年(一八五二)二月の記録に「古来の能装束が切損し役に立たなくなったので奉納を願う」とあることから推して大須戸能の起源はこれよりなお久しく遡るものと推定される。伝によれば弘化元年(一八四四)の冬、庄内の黒川能役者蛸井甚助が当地に逗留した際、庄屋、神主など村人十九人の能社中が、数年にわたり熱心な指導をうけ、嘉永四年三月鎮守八坂神社の社殿ではじめて演能したが、当時既に式三番の外能十五番を習得していたという。神社の境内には、蛸井甚助が帰郷する際、記念に残したといわれる「黒川や上に流れて花の郷」なる句碑がある。その後明治、大正、昭和にかけて更に庄内黒川より師を招き、新たに十番を習得した。能が神事として演じられたのは、昭和七年八坂神社が村社に昇格してからで、以前は一月十一日の山神祭の日と、四月三日の節句に演じられていた。八坂神社の境内には、古くから、能舞台が設けてあったが、雪害で壊れて以来しばらく再建を見なかった。その後、大正二年三月大正天皇即位を記念して建設した能舞台も老朽化し、昭和六十三年現在の能舞台が新設された。

中山家との関係

集落の旧家中山与惣右衛門は、創立当時より代々能の斯道奨励の衝にあたり、能装束をはじめ幕、組立式能舞台、能面等の寄進、後継者の養成など伝統芸能の維持にこつとめ今日に及んでいる。

交通のごあんない

- バス (令和4年3月1日現在)
 - 行き JR村上駅前から
 - 北中線 10:19発 → 10:55 塩野町車庫前(下車) → 徒歩30分(900m)にて大須戸着
 - 塩野町線 11:06発 → 11:48 塩野町車庫前(下車) → 徒歩30分(900m)にて大須戸着
 - 大須戸線 11:42発 → 12:28 大須戸(終点)着
 - 北中線 13:16発 → 13:52 塩野町車庫前(下車) → 徒歩30分(900m)にて大須戸着
 - 帰り
 - 大須戸 15:55発 → 15:58 塩野町車庫前 → 16:33 村上駅前着
 - 塩野町車庫前 15:43発 → 16:17 村上駅前着

- 車 日東道朝日まほろばIC~国道7号~大須戸 12分(8km)



お問い合わせ

新潟県村上市田端町4番25号 村上市教育委員会
生涯学習課 文化行政推進室
電話 0254-53-7511

新潟各形文化財

大須戸能楽組

弓八幡
弓矢を形にし例を以て弓を發に入水
能楽の神代乃發なり



とき 令和4年4月3日(日)

午後1時

ところ 八坂神社能舞台

新潟県村上市大須戸

大須戸能保存会

謹啓 陽春の候貴台愈々ご清祥の段ご同慶に存じあげます。
来る四月三日(日)午後一時から大須戸能舞台において左の番組により定期能を
演ずることに相成りました。

つきましては、公私共にご多端の折りとは存じますが、斯道奨励のためお差繰
りご来観賜りますようご案内申し上げます。
敬具

令和四年三月吉日

大須戸能保存会

会長 中山定一郎

能役割と略解説

弓八幡

(曲柄…脇能 季節…二月 所…山城国綴喜郡石清水八幡宮)

ワキ	(勅使)	大滝 正貴	笛	中山晴夫	地謡	加藤 隆
ワキツレ	(従者)	中山蓮(小五)	小鼓	中山吉典	〃	中山平二
〃	〃	中村碧士(小五)	大鼓	中山和衛	〃	中山忠彦
前シテ	(尉)	中山晴剛	太鼓	中山国雄	〃	中山穂積
前ツレ	(男)	中山英樹	〃	〃	〃	渡辺 昌
後シテ	(高良明神)	中山栄太夫	〃	〃	〃	〃
後	見	中山博之	〃	〃	〃	〃

〔構想〕後宇多院の臣下が、男山八幡宮初卯の御神事に陪従として
参詣せよとの宣旨を蒙ったので、八幡山に到り神拜をしようとする
と、多い参詣人の中に、錦の袋に弓を入れた一人の老翁が居たので、
何處から参詣した者かと訊ねると、自分は永年当社に仕へている者
であるが、桑の弓を我が君に獻げようと思つて貴方の御参詣を持つ
ていたのであると答え、更に弓矢で天下を治めた謂われを尋ねると、

老翁は三韓征伐の事や八幡宮の由来などを語つた後、実は、八幡宮
の神託を伝える為に現れた高良の神であると言つて消失した。
―中入―そこで臣下が帰ろうとすると、音楽聞こえ靈香薫る中に、
高良の神がその本姿を現し、舞を舞うて御代を祝い、本社の神徳を
讃へる曲である。武力は天下を平和に治むる為のもので、争うべき
為のものではない事を主張した曲である。

狂言 膏薬煉

シテ (鎌倉方) 中山郁男 アド (都方) 中山金重
後 見 渡辺 昌

〔構想〕鎌倉の膏薬煉と都の膏薬煉とが道で出合い互いに自慢し合
う。鎌倉方の者は走り去る馬を吸い寄せ馬吸膏薬、都の者は大石を

吸寄せた石吸膏薬だと云うそれらの薬種を明した後、膏薬を鼻につ
けて吸い比べる。

箆 (曲柄…修羅物 季節…二月 所…攝津国神戸生田神社内生田森)

ワキ	(旅僧)	中山淳一	笛	中山晴夫	地謡	中山博之
ワキツレ	(従僧)	大滝 正貴	小鼓	中山英樹	〃	加藤 隆
ワキツレ	(従僧)	中山絢叶(小六)	大鼓	中山平二	〃	中山郁男
前シテ	(里人)	中山順一	〃	〃	〃	中山穂積
後シテ	(梶原景季)	中山国雄	〃	〃	〃	〃
後	見	中山栄太夫	〃	〃	〃	〃

〔構想〕西国から都へ向う旅僧が、摂津の生田川のほとりで見事な
梅に目をこめ、里人に問うと、源平合戦の折、梶原景季がこの梅を
箆に挿して戦つたという箆の梅のいわれ、景季の武勲、源平両軍の
陣形などを詳しく語り、自分は景季の幽霊だと告げて梅の木陰に失

せる。―中入―
武者姿の景季が現われ、修羅道の苦しみを細叙し、一時は閻浮の
山里海川がそのまま修羅の巻と化したと見て驚くが、やがて心鎮ま
り、昔日の奮戦ぶりを再現してみせ、旅僧に回向を乞うて消える。